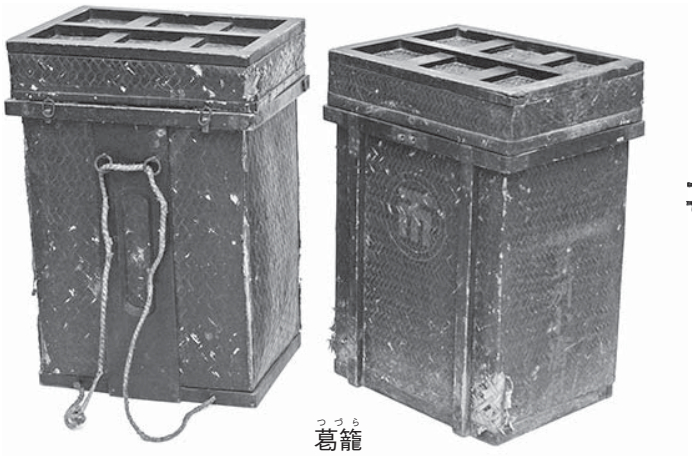
沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.40 No.2（通巻207号）

2015.9.25（年４回発行）



葛籠

葛籠の本体（左）と蓋（右）の内側

錠前の掛かった葛籠。蓋の反対側は鉤に金具を通す形式の蝶番が使われている。

蓋を開けた状態。手前は懸子という、葛籠の縁にかかる浅い箱。

山本家の葛籠

寄贈資料の中から　**葛籠**

今回は、資料の中から葛籠を紹介します。葛籠は、衣類や文書などを収納する、箱型で被せ蓋のある調度です。葛籠ともいい、「こ」は籠のことです。古くは葛藤の蔓で編んだ籠をいいましたが、後に竹や檜を薄く剥いだもので作られるようになり、上に和紙を張り外側に渋や漆を塗ったものを指すようになりました。

資料の葛籠は、竹で網代編みに編まれ、角を竹材や蚊帳の生地で補強して和紙を張り、漆を塗っています。箱の上下には木枠が付き、口縁部を鉄金具で補強しています。背負って運べるように、木製の背中当てと肩紐がついています。錠前を掛けることができ、懸子が付属するものもあります。

大きさは、写真左上の資料では、横50.0㎝、縦39.8㎝、高さ71.5㎝、重さは4.1kgです。この葛籠の内部には墨書があり、側面に「葛籠」と書かれ、「御書附、諸帳面入」として、安政七年（1860）三月に室伏嘉七郎という人物がこの葛籠を手に入れた、と記されています。

竹製の葛籠は室町時代頃には作られていたとみられます。江戸時代には規格化され、衣類の収納箱や婚礼道具として普及しました。その後、箪笥や行李などに押されて、一般家庭からは姿を消していきました。

右下の葛籠は、武田信玄に仕えた山本勘助の子孫が所有していたものです。竹の四ツ目編みで、寸法は、横30.0㎝、縦16.7㎝、高さ55.0㎝と小型で薄く作られています。

この葛籠の正面と背面には、「三の丸城内 山本氏」、「御朱印状　御感状」と朱書されています。三の丸城内というのは、江戸時代から明治時代に入るまで松平家へ仕えた山本家の居住地の一つを指していると思われます。御朱印状とは、朱印が押された書類のことで、御感状とは、主君や上官から与えられる、戦功を称える賞状をいいます。この葛籠は、勘助やその子孫が受けた書状を入れるものとして江戸時代に製作されたと考えられます。

職人昔語り

車大工　佐藤　柳太郎さん

木を見る

佐藤さんが作る車は、荷台や車輪といった木製の部分と車軸や車輪の周りにはめる輪金といった鉄製の部分に分かれる。木製の部分は場所によって木の種類が決まっており、また、同じ木の種類でもその特徴によって使い分ける。木材の買い付けを任されるようになった佐藤さんは、車のそれぞれの部位にどういった材木が必要であるかということを把握しておかなくてはならない。木材の買い付けの失敗は、大きな損失に繋がる。

車に使う木の種類は、ケヤキ・カシ・ヒノキの３種類である。ケヤキとカシは、非常に硬い木である。車軸を挿し込む部分であるドウ（胴、ロクロとも）にだけケヤキが使われ、荷台や親木や車輪のヤ（輻、アミダボウとも）やその外周のクシガタ（櫛形、ハイタとも）といった車の大部分にはカシが使われる。第二次世界大戦直後、カシの入手が難しくなると、人が曳く荷車にだけはヒノキを使用した。

ケヤキは芯に近い部分は赤くなっており、この部分をアカミ（赤身）と呼ぶ。樹皮に近くなるにつれて白くなっていき、この部分をシラタ（白太）と呼ぶ。シラタの部分は水気に弱く腐りやすいため使用できない。また、芯の部分は割れが入っているため使うことができない。芯が入らないように材木を取ることをシンサリ（芯去り）と呼び、芯が入るように材木を取ることをシンモチ（芯持ち）と呼ぶが、ドウとして使える材木はアカミのシンサリの部分となる（図 1）。

一口にカシと言っても何種類かのカシがある。車作りにおいて一番高級とされるカシはシラカシ（写真 1）である。その名の通り、材の色は白い。修善寺方面に多く生えている。シラカシは大きくなる前に切られてしまうことが多いため、太いシラカシは少ない。まっすぐな素直な木が多いので道具の柄として使われることが多い。次にアカガシである。愛鷹（あしたか）山にはアカガシが多く生えている。シラカシよりも少し重みがある。細みの木が多いシラカシに比べ、アカガシには太い木があるが、まっすぐな木は少ない。ケヤキと違いカシにはアカミとシラタがはっきりしておらず、樹皮に近い方が上材とされる。枝が入るとそこは節となってしまうため使用できず、枝下の部分だけを利用する。丸太を半分に割り、枝の生えている側を捨てて半分だけを利用することもあった。枝下４ｍ、目通り 40㎝以上のまっすぐなカシが上材とされていた。目通りとは、自分の目の高さの位置での木の直径である。ウシグルマ（牛車）の梶棒は上側に反っているが、まっすぐな木材から反ったように材木を製材すると、木目が材木の曲がりに沿うように入らないため、途中で折れてしまう可能性がある。そのため、梶棒の反りにあうような曲がったカシを使用する。このような曲がったカシは非常に貴重であるため、伐採から製材まで自らが指示を出す。

写真 1: シラカシ
（柿田川公園）

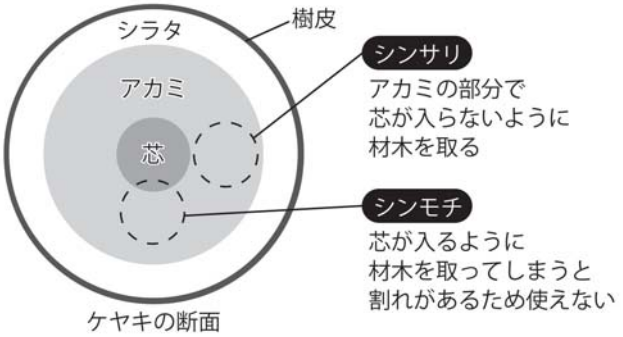


図 1: ケヤキの材木の取り方

カシの買い付けはヤマシ（山師）と呼ばれる木材の仲介業者から話が回って来た。太いカシの話が来ると実際にカシが生えているところを見に行き、ウロがないか、腐っていないかを確認する。売り手と無関係な近所の人からカシの成育環境について聞いて回り購入するかを検討することもあった。ウロが無いつもりで購入しても、いざ製材してみるとウロがあることが多く、太いカシの立木の状態での購入は非常に難しい。木口を見れば木の状態がわかるので、伐採された丸太で購入すれば失敗はない。

木の伐採は、９月から１月頃までの間に伐採する。それ以外の時期は水を吸い上げているといわれ、木を乾燥させている間に虫が付いてしまう。そのため、伐採時期を過ぎた時期に切った木材は購入しない。

伐採した木は乾燥させる必要がある。乾燥させないで作ってしまうと後々反りがでてしまったりすることもある。２年３年と乾燥させたいところだが、それだけの材木を抱えるだけの資力がなかったので、短期間の乾燥だけで車を作り始めることが多かった。お金があるうちはなるべく木材を購入し、十分な乾燥を施して丈夫な車を作るように心がけていた。

(話：佐藤 柳太郎氏 昭和５年生まれ 沼津市幸町在住)

沼津の石丁場遺跡

⑸　水戸徳川家の石丁場

これまで西浦地区に尾張徳川家や阿波蜂須賀家の石丁場があったことをご紹介してきましたが、今回は西浦江梨地区に残る水戸徳川家の丁場の様子をご紹介します。

大久保丁場

尾張徳川家の西谷丁場の東側には、水戸徳川家によって大久保丁場が設けられていたことが、絵図面に記されています。現在でも竹林の中を歩くと、石を割る際に掘られた矢穴がうたれた大きな石が残り、ここから江戸城へ石が運ばれたことが思い起こされます。

尾張家西谷丁場との境界付近の道沿いには、下の写真のような刻印が刻まれた石が残されており、「水」の意匠に似ていることから、水戸徳川家を表す刻印であることが推測されます。

もう一つの石丁場

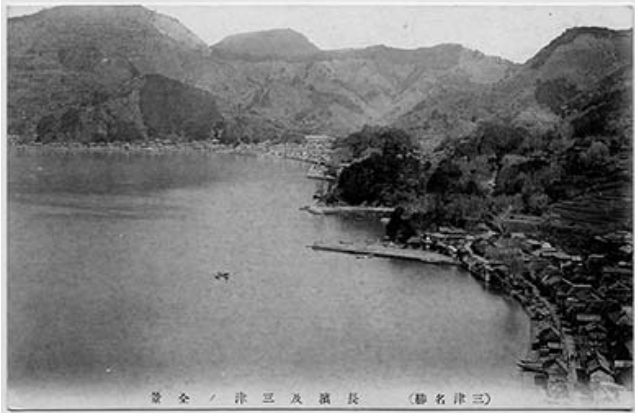
江戸時代の江梨村の概況が記された「延享二年(1745) 豆州江梨村反別指出シ帳」(江梨区有文書) には「一　水戸様御石御丁場　弐ヶ所　預り主源八　右御石数合四百三拾弐本　同人」とあり、水戸徳川家の石丁場は江梨村に２ヶ所存在したことがわかります。１ヶ所は前述の「大久保丁場」ですが、もう一つの石丁場の行方は長らく不明でした。しかし、最近の調査で水戸家の丁場と思われる場所が見つかりましたので、ご紹介します。

西側斜面の作業丁場

前回ご紹介した田ノ輪地区の海側は、人が下るのも容易ではない急傾斜面が広がり、海岸は断崖となっています。その代わり、山体の一部には風雨に洗われた石の露頭が広がり、そこで集中的に石を割った作業丁場が見つかりました。

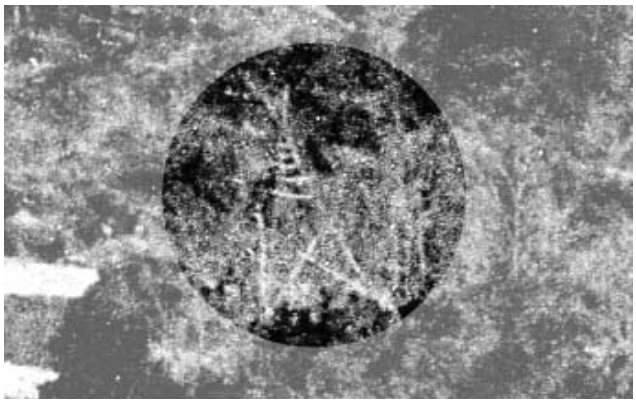
石の多くは長方形に粗割りされており、その面には、写真のような刻印が刻まれています。この刻印は大久保丁場に残された刻印にそっくりです。この刻印を根拠に、この地が水戸徳川家のもうひとつの石丁場であると考えています。作業丁場は大きくはないものの、落ち葉の下には刻印が刻まれた多数の石を確認することができ、その刻印の数は現在のところ西浦では随一です。

魚見のある風景⑩　内浦長浜二又



上の写真は、西間門の田中義光さんから提供を受けた伊豆三津金指天眞堂発行の『三津名所絵葉書』の内の一枚で、「三津名勝　長浜及三津全景」と題するものです。内浦長浜から三津に向かって撮影したもので、右手前が長浜の集落です。右中央の岬の手前に埋立地がありますが、その後の入り江が二又と呼ばれるところです。入り江の真ん中に小さな岬が張り出していて、2つに分かれるので、二又と呼ばれています。かつては「中ノ島水族館」、「三津天然水族館」、現在は、「伊豆三津シーパラダイス」と呼ばれる水族館があるところです。

後方の岬は、長浜と三津の境で、裏側には、中腹に岡部長景さんの別荘、その裾には、「豆州内浦漁民史料」を世に出した渋沢敬三さんが滞在した旅館松濤館があります。その奥が三津の集落です。一番奥に内浦小学校も見えます。



上の写真は、手前の岬の部分を拡大したものです。岬の先端近くに4本の丸太柱を立てて、上方で結び、四角錐のように組んであります。下部には筋交いが入れられています。上部は横に桟が渡され、覆いをつけることができるようになっているようです。人が桟に腰掛けているようにも見えますがはっきりしません。この櫓形式の魚見は、二又網度と呼ばれる漁場の魚見であったと考えられます。

資料館からのお知らせ

夏休みの体験学習を開催しました！

夏休みの企画として、8月4日(火)に、体験学習「沼津御用邸本邸探検」を開催しました。本邸に使われていた瓦が、どこから来たかを知るために、刻印の拓本を採りました。愛知県や京都府から運ばれて来たことが分りました。

かわいい侵入者がありました！

資料館のドライエリアという半地下室に狸の子供が住み付きました。母親が大雨から避難させたようです。5匹いましたが、母親が迎えに来たようで、1ヶ月で引っ越しました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2015.9.25 発行　Vol.40　No.2（通巻 207 号）
編集･発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷 2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:http//www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp

R75
古紙パルプ配合率75%再生紙を使用しています